

# ときの玉手箱

博物館からのメッセージ



第80回

## 技を誇る

### 継笛

雅楽では、竜笛と狛笛、神楽笛の三種の竹製の横笛を使いわけます。

竹の上に細い樺（桜の樹皮）が巻いてあるので、実のところ構造はよくわからないのですが、子細に見ると、一本の竹から作られたものと、いくつかの部材からなるものがあります。

後者の場合がほとんどで、表皮を削り、縦に割って整形し、あるいは、本体と頭部を別材として繋ぐなど、意外と細かな細工が施してあります。

適当な長さや太さの竹を切り取って、吹口と指孔を穿っただけの単純なつくりから、よりよい音を求めて、笛の作り方も手の込んだ仕様となったのでしよう。

ところで、写真の竜笛は、四つのパーツからなるという変わり種です。なぜわざわざこんなことをしたのでしょいか。

楽器の中で類例を捜すと、三味線の継棹が思い浮かびます。携行に便利ないように棹の部分をいくつかに分けて、コンパクトに収納するようになっています。

しかし、長さ約40cmばかりの竜笛の場合、継笛とすることで、持ち運びが格段



▲竜笛（継笛） 江戸時代（彦根城博物館蔵）  
左上は笛筒

▼上の笛をばらばらにしたところ



に便利になることはありませんし、構造が複雑になるぶん、音色に微妙な影響があるように思えます。

この笛が作られた最大の理由は、外見からは、ふつつの笛にしか見えないものが、実は精緻な細工を凝らしたつくりになっている、というところにあります。

笛師の「こんなこともできますよ」という、自己主張が感じられます。

また、これを使う人や種明かしを見せられた人たちの側からいうと、そんな仕掛けを受け入れて楽しむ心理があったという点にもなります。

楽器の本質からはずれた遊びの部分で、

この笛は成り立っています。

さらに笛筒も、四つの短い管を繋いだ形とします。一見、地味ですが、黒漆の地に金の蒔絵で施した文様は、なかなか趣があります。

まず向かって左の管は梅と桜の花で春。次が尾長鳥。三つめは秋の落ち葉。イチヨウ、マツ、クヌギ、カエデに、ドラングリが加わります。春秋で四季の循環を、尾長鳥で瑞祥をあらわしています。

最後は月。水面に映る月影を銀泥で描きます。ところが笛筒を裏返してみると、上部の雲間に銀製の三日月の金具が嵌め込んであります。すなわち、この表裏の二つの月で、天と地の広大さを表現しているのです。

見えない部分に技を仕込み、また直裁に美を謳い上げるのではなく、小さな器物に大きな世界をあらわしてみせたところに、江戸時代の捻りの利いた美意識の一端を感じるがあります。

（彦根城博物館学芸員 齋藤 望）

写真の笛は、彦根城博物館の常設展示「雅楽の伝統」で4月9日(水)から5月12日(月)まで展示します（期間中無休）。